お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
菅野　良市 （旧姓　鈴木）	男　性	１５ 歳	新城市吉川

「防空監視哨員から予科練へ」

２０２５．３．５取材

○　１４歳で新城防空監視哨員に

新城防空監視哨は新城警察署の屋上にありました。監視哨へ昭和１９年４月から１１月まで勤務しました。家は東新町で，当時は新城青年学校に在籍していましたが，同級生３人が４月からいっしょに入りました。哨員のうち６人は同級生でした。他に先輩が９人いて，私たちは人数が足りないときに入る補助的な要員だったと思います。先輩が二人と同級生二人が一つの班になり，副哨長が加わって５人で勤務しました。昼の勤務は８時頃から始まり，１日１２時間勤務で夜勤と交代だったように思います。２時間から３時間ぐらいで立哨と通信の役割を交代しました。哨長は新城国民学校の本田九穂校長先生でした，監視哨にみえることはほとんどありませんでした。副哨長は４人の在郷軍人が交代でみえました。国民学校教師の森田速算院長（珠算学校），竹下兵長（的場），河合上等兵（東新町），古井軍曹（東新町）でした。哨員は１５人いましたが全員新城町出身でした。哨員の勤務体制における補助の指示は，森田先生が行っていました。

哨員を決定する時は，青年学校の森田先生（副哨長）が監視哨へ１０名ぐらい集めて，その中で私と清水，小林の３名が哨員に決められたのです。

ただ，私は予科練に入る予定になっていたので，５月から６月にかけて１ヶ月ぐらい東春日井郡にあった海軍の本地ケ原滑空訓練場で，グライダーに乗る訓練を受けに行っていました。そのため，監視哨勤務は少なくなりました。

食事は，朝は自宅で済ませ，昼と夜の弁当を持っていきました。ただ，当時はまだ空襲で敵機が来ることはなく，見かけたのは日本の戦闘機ばかりでした。特に大変なことはなく，結構のんびりしていました。敵機が飛来するようになったのは１２月以降のことで，その時は予科練にいたので，監視哨でお役に立てたという実感はあまりなかったですね。

昭１９年当時の監視哨員

先輩：菅谷（鋸屋）　豊田（時計屋）
今泉（中部配電）石井（時計屋）
浅野（写真館）　牧野（床屋）
松井（油屋）　中野（無職）
同級生：清水，小林，菅野
春日井，阿部，大滝

一式戦闘機「ハヤブサ」

機種を覚えるのはパンフレットのようなものがあり，グラマンやＢ２９，ロッキードなどの機種の特徴が図で書かれていました。１０種類ぐらいの戦闘機を頭に入れていましたが，敵の飛行機を見ることはなく日本の飛行機ばかりでした。

飛行機を発見したときの知らせ方は，立哨台に立つ二人が，「何番発見」，「山」，「敵・味方」，「機種」（ゼロ戦，１式など），「進行方向」を下にいる通信員に伝声管で知らせます。山の名前を知らせるのは周囲が山だったので方位が分かりやすかったためで，「南方の金山，北の雁峯山」などと言いました。何番というのは機種によって決められていた番号です。すると通信員がメモをとり，通信室のもう一人が復唱して確認し，電話で豊橋監視隊本部に連絡します。本部は豊橋警察署に置かれていました。隊長は警察署長で，本部員は女性が採用されていましたので連絡相手は女性でした。飛行機が消えると，「何番脱去，南方へ去る」というように連絡しました。

昭和２０年に入ると空襲のため敵機がひんぱんに来るようになり，新城でも監視哨員が増員され，６名による２４時間体制になったようです。

○　予科練　第２岡崎海軍航空隊へ

昭和１９年１２月１５日，私は海軍の第２岡崎海軍航空隊（予科練）に一人で入隊しました。まだ１４歳でしたが，行く前に富永神社で儀式があり，鈴木町長の激励を受け，壇上であいさつをしました。国民学校の６年生と高等科の１，２年生も隊列を組んで新城駅まで来て，万歳三唱と歓呼の声に送られて新城駅から出発しました。

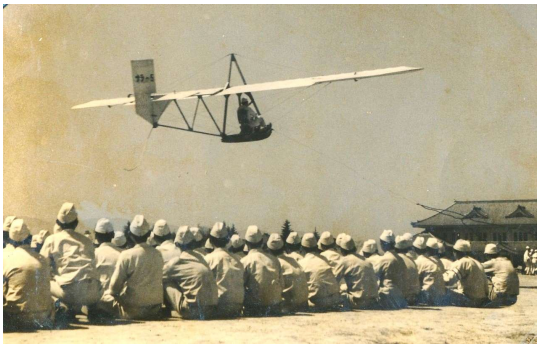
岡崎では飛行機の操縦法を習いました。ゼロ戦の前身になる機種の９６式艦上戦闘機を使っていました。訓練は厳しくて大変でしたが，歓呼の声に送られたことが脳裏にあり，嫌だとは思わなかったし後悔もなかったです。仲間といっしょでしたし，どんな猛訓練も当たり前だと思っていました。真冬に，パンツと半袖一枚でマラソンをしたこともありますけど，辛いとは思わなかったですね。だれでも通る道だと思っていました。私は，どうせ徴兵で兵隊に行くなら，予科練の少年航空兵に志願して飛行機に乗りたいと思っ

岡崎海軍航空隊の概要

基地は，現在の豊田市の上郷中学校周辺の広大な地にあった。この基地には第一，第二，第三岡崎海軍航空隊があり，第一，第二岡崎海軍航空隊には，およそ12,000名が入隊している。６ヶ月間の訓練で，93式陸上中間練習機（通称赤トンボ）による飛行訓練・航空機整備を行い，各地の実施部隊へ配属されていった。第三岡崎海軍航空隊は，特別攻撃のための搭乗員の育成を行い，訓練の後，特別攻撃隊として沖縄へと飛び立っていった。

この戦争で尊い生命を落としてしまった第三岡崎海軍航空隊の14歳～19歳の若者たちを悼み，1974年（昭和49）「若桜の碑」が建てられた。

（愛知エースネットＨＰ参照）



予科練の滑空訓練　昭19橿原:村田進氏提供

ていましたから。

岡崎の第３岡崎航空隊では飛行訓練をやっていました。通称「赤とんぼ」という練習機とグライダーを使って飛行訓練をしました。グライダーの最高高度は７ｍほどでしたが，何度も練習したので今でも操縦桿の使い方は覚えていますよ。（着陸するときの操縦方法を実演されました）

若桜の碑（菊水のブログより）

１ヶ月ぐらいグライダーの練習ばかりで，実際に飛行機を操縦できなかったことがとても残念でした。先輩たちの中には特攻隊で亡くなった人もいました。今は岡崎海軍飛行場はありませんが，田中角栄が揮毫した「若桜の碑」が跡地に建立されています。

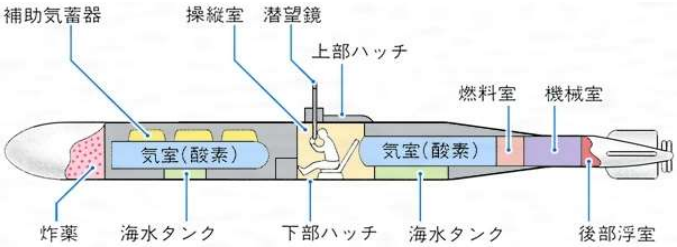
２０年３月２１日頃に予科練教育は中止になり，私は，静岡県西伊豆の戸田に入りました。

○　静岡県戸田の海軍２１分隊に

私が配属された分隊では，ラッパを吹く隊員が不足していて補充が必要になっていました。ところがだれも吹けず，私だけ高等小学校で２年間ラッパを吹いていたので，即ラッパ手に採用されることになりました。

戸田では，特攻隊の人間魚雷「回天」を入れるために山をくりぬいて穴を掘っていました。人間魚雷は三島に来ていたと聞いていましたが，戸田に保管されると，私たちがそれに乗ることになったようです。しかし，途中で終戦になりました。ですから実物は見ませんでした。

戦後になって分かったことですが，私たちは予科練は特別な待遇を受けていました。そのためか食べものは豊富にあり，全く不自由はありませんでしたね。



人間魚雷「回天」の構造　日本大百科全書ＨＰより

聞いた話ですが，東新町に入った陸軍の部隊でも米は十分配給されず，大豆油をしぼった豆かすが混ざった食事だったそうです。私が新城へ帰った時には，米を６升もらってきました。貯金も６００円もらいました。やはり，予科練は特攻隊として出撃するための訓練を受けていたわけですから，特別待遇だったのですね。もし，特攻する戦闘機が残っていれば‥‥，もし終戦がもう少し遅ければ‥‥，私は戦闘機か回天で命を捧げていたかもしれませんね。

聞き手　　菅沼信秋，岩山欣司（市教委），伊田良種
文　責　　安形茂樹　　（岩山氏以外は八名郷土史会員）